

マルコによる福音書 12 章 13 節～17 節

2017 年 12 月 22 日

古本 靖久

1、聖歌 505 番 「もちいたまえ 神よ」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 86 ページ）

4、テキストの位置

今週も火曜日の出来事を取り上げます。受難週の中で最も多くの記事があるのは、この火曜日です。

エルサレムにイエス様が入ってからまだ三日目ですが、ユダヤ人の指導者たちはイエス様の言葉尻をとらえようと、様々な論争を仕掛けていきます。

エルサレムにて	月曜日	11:12-14	いちじくの木
		11:15-19	神殿とは
	火曜日	11:20-26	信仰と祈り
		11:27-33	神からの権威
		12:1-12	取り上げられる実り
		12:13-17	神のものは神へ
		12:18-27	生きている者の神
		12:28-34	たいせつな掟
		12:35-37	キリストとは
		12:38-40	律法学者批判
12:41-44	たくさん入れた人		

12 章 37 節までの間に、納税は律法に適う行為か、一人の女が次々と七人の兄弟と結婚したなら復活の際には彼女はだれの妻になるのか、最も重要な掟とは何か、ダビデがメシアを「主」と呼んでいるならどうして彼がダビデの子であるのかと矢継ぎ早に四つの質問を投げかけます。さらに火曜日には 13 章の出来事も含まれます。

ユダヤでは弟子は教師に質問をし、教師はそれに答えることによって、弟子たちは学んでいきました。しかしこの場面では、ファリサイ派やヘロデ派の人々はイエス様に学ぼうとはしていないようです。

それでは彼らの目的は何だったのでしょうか。見ていきましょう。

5、節ごとに

◆神のものは神へ

12:13 さて（そして）、人々（彼ら）は、イエスの言葉じりをとらえて陥れよう（言葉で彼を捕まえよう）として、ファリサイ派やヘロデ派の人を数人（何人か）イエス（彼）のところに遣わした（す）。

前回から物語は続きます。前回の場面でイエス様と問答をしていたのは、祭司長、律法学者、長老たちでした。彼らはイエス様が自分たちを非難しているのに気づき、イエス様を捕らえようとしたのですが、群衆を恐れてイエス様の元から立ち去りました。

その続きの出来事ですから、この「彼ら」とは祭司長、律法学者、長老たちのことです。彼らのイエス様を捕らえようとする思いは、弱まることはありませんでした。ファリサイ派やヘロデ派は彼らに遣わされたに過ぎず、イエス様の本当の論争相手は祭司長、律法学者、長老たちだと言えるのです。

ファリサイ派は何度も出てきますが、ファリサイとは「区別する」ことを意味します。律法を忠実に守るがあまり、罪から自分を遠ざけ、罪人と思われていた人と関わろうとしない人たちでした。だから罪人や徴税人と食事をするイエス様のことは、許せませんでした。

またヘロデ派は3章6節にも出てきました。実際にはどんな人たちだったかは詳しくわかっていません。ヘロデ・アンティパスの支持者や家臣からなる貴族階級だったのでしょうか。世俗の政治にも関与していたのでしょうか。

彼らの目的は、イエス様を捕まえることでした。この問答は真理を追究するものではなく、イエス様を追い込むためのものでした。彼らの心は閉ざされていたのです。

12:14a （そして）彼らは来て、イエス（彼）に言った（う）。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず（人の顔を見ず）、真理（真実）に基づいて神の道を教えておられるからです。」

人のことを批判する前に言葉でおだてておくということは、今も昔も、世界中で使われている話法です。しかし彼らがイエス様を本当に真実な方だと思っているなら、イエス様を受け入れているはずですが。

「あなたは真実な方だから」などと言われると、その後に質問に答えざるを得ません。わたしたちにもそのような経験はあると思います。

さてここで、「人々を分け隔てする」と訳されている言葉について説明します。この言葉は「人の顔を見る」という意味を持ちます。つまり、人の外見や地位などによって、人を差別するという意味になるのです。イエス様はそうではなく、すべての人々を受け入れています。そして神さまだけに目を向け、神の道を教えておられます。



この彼らの言葉は、的を射ていると思います。しかし彼らはこの言葉を、イエス様を陥れるために用いているのです。

12:14b ところで、皇帝に税金（人頭税）を納めるのは、律法に適って（許されて）いるでしょうか、適っていないでしょうか。（わたしたちは）納めるべきでしょうか、納めてはなら（るべきでは）ないのでしょうか。」

ここから彼らの策略が始まります。質問は税金についてのものでした。税金を払うべきかどうかという議論は、わたしたちにとっては馴染みのないものかもしれませんが。しかし当時のユダヤの人たちにとっては、大きな問題でした。

まずここで書かれた税金とは、人頭税のことをあらわします。ローマ帝国の支配下にあったユダヤの人たちは、人口調査によって住民登録をさせられます。そしてすべての成人は、ローマに決まった額の人頭税を納めていました。

つまり異邦人である支配者が、自分たちに対して「頭数」に応じた銀貨を徴収するのです。これでは奴隷と同じだと、民族主義者や熱心党と呼ばれるグループは納税に反対していました。

もしもイエス様が「納めてよい」と言ったら、異邦人に従う者だとユダヤの民族主義者や熱心党を敵に回すこととなります。さらにローマの支配から脱却したいと願っている、民衆の人気も失墜することでしょう。

しかし「納めなくてよい」と言ったとしても、帝国に対する反逆者として告訴される恐れがあります。つまりどちらの答えを言ったとしても、イエス様が窮地に追い込まれるように仕組んであるのです。

12:15 イエス（彼）は、彼らの下心（偽善）を見抜いて（彼らに）言われた。「（あなたたちは）なぜ、わたしを試そうとする（試みる）のか。デナリオン銀貨を（わたしに）持って来て見せなさい。」

イエス様は彼らの「偽善」を見ます。この「偽善」という単語は、マタイ福音書では「悪意」、ルカ福音書では「たくらみ」という語になっています。ともかくイエス様は、まともに学ぼうとしない彼らの心を見抜きます。

そしてイエス様は、彼らにデナリオン銀貨を持って来るように言いました。デナリオン銀貨は当時ローマで流通していた貨幣で、人頭税を払うときにはこの銀貨を使うことが義務付けられていました。

16 節に肖像と銘のことが書かれていますが、ユダヤ人にとって肖像のついた貨幣を使うことは耐えられないことでした。しかし日常的な商取引において、そのような貨幣を使うことは避けられません。したがって使うときも、目をそらして肖像を見ないようにしていたそうです。

12:16 （そして）彼らがそれを持って来ると、イエス（彼）は（彼らに）、「これは、だれの肖像と（か、また）銘か」と言われた。彼らが（彼に）、「皇帝のものです」と言うと、

「持って来なさい」と言われて、彼らはすぐにデナリオン銀貨をイエス様に渡します。つまり彼らは、普段からデナリオン銀貨を持っていたのです。本来であれば、持っていることすら許されないのです。



それは貨幣に肖像と銘が彫られているためです。たとえば皇帝ティベリウスの貨幣には、「TI CAESAR DIVI AUG F AVGVSTVS（神聖なるアウグストゥスの子で自らアウグストゥスたるティベリウス・カエサル）」と刻んでありました。簡単に言うと、皇帝(カエサル)が神格化されているのです。また裏面には、彼の母であるユリア・アウグスタが神々の玉座についている姿が描かれています。

つまり皇帝の肖像が彫られた貨幣を持つことは、偶像を刻むことを認めることになり、また偶像を礼拝することにもつながるのです。

12:17 (そして) イエスは (彼らに) 言われた。「皇帝のものは (なら) 皇帝に (納めなさい)、(そして) 神のものは (なら) 神に返しなさい。」(そして) 彼らは、イエス (彼のことを) の答えに驚き入った。

納さめなさい、納めなくてもいい、どちらの答えを言ってもイエス様は追いつめられる状況でした。しかしここでイエス様は、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」という有名な言葉を伝えます。

この言葉は、国や支配者の権利を擁護していると思われることがあります。それはローマの信徒への手紙 13 章 1~7 節「支配者への従順」に影響を受けているのかもしれない。

人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。従って、権威に逆らう者は、神のために背くことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。……………すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい。(ローマ 13 : 1~7 より抜粋)



しかしここでイエス様が言われていることは、真に神さまに属するものに人は心を注ぐべきだということです。ローマの信徒への手紙を書いたパウロは、世の中の秩序の転換が迫っているという期待のもと書かれています。イエス様の言葉はわたしたちに対する具体的な呼びかけとして響いています。

わたしたちは神さまのものを神さまに納めるのです。では神さまのものとは何でしょうか。創世記 1 章 26~27 節にこのようにあります。

神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。(創 1 : 26~27)

デナリオン銀貨が皇帝のものであるように、わたしたち人間は神の像 (かたち) を帯びており、神さまのものなのです。皇帝のものを納めるかどうかは大きな問題ではないのです。神さまのものであるはずの自分たちは、神さまに自分自身をささげているのかということが大事なのです。

<今日の箇所から>

「もちいたまえ 神よ」、今日の聖歌の最初の部分です。神さまに用いられる、わたしたちはそのような者でありたいと願います。

今日の箇所に、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」という言葉が出てきました。この言葉を元にして、「国家権力の言うことは聞かないといけない」という考え方もありました。しかしイエス様が一番伝えたかったことは、「神さまのものは神さまに返そうよ」ということです。

前回のぶどう園の農夫のたとえの中でも、すべてが整えられた主人の土地で得た収穫を自分のものだと勘違いしてしまった人がいました。今回の箇所もそうです。神の似姿に作られた自分を忘れてしまい、神さまのみ心を問うことなく、自分勝手に生きてしまったとき、わたしたちは何一つ神さまにお返しできていないのだと思います。

神さまはわたしたちに何を求めておられるのでしょうか。わたしたち一人ひとりが神さまに用いられるように、祈り続けていきたいと思えます。



今回の学びはこれで終わります。次回は1月25日(木)10時30分からです。「生きている者の神」(マルコ12:18~27)について学んでいきます。